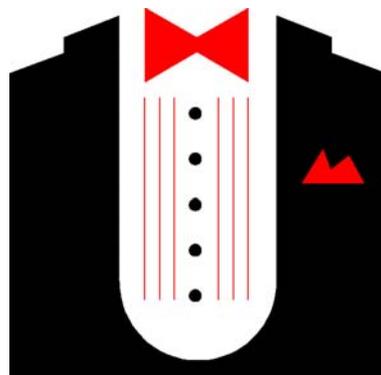


WHITE CHIRSTMAS

I'm dreaming of a white Christmas
Just like the ones I used to know
Where the treetops glisten,
and children listen
To hear sleigh bells in the snow

I'm dreaming of a white Christmas
With every Christmas card I write
May your days be merry and bright
And may all your Christmases be
white



Naga & Tera Band

こんにちは！ナガ&テラバンドです。

このたびは、未熟な演奏におつきあいいただき、まことにありがとうございました。

とくに、朗読タイムは練習不足の企画倒れでした(>_<)。

みなさまの睡眠に貢献する一方、どのようにしたら有意義な時間がすごせるだろうかという可能性の会話に終始した方などもおられ（笑）、さまざまな観点から、皆様方の自己成長に貢献したものと自負しております。

マイクの調子、本人の調子などの関係でお聞き苦しいところも多々あり、たいへん、申し訳ありませんでした。

さて、こうした中でも、「あの歌詞をしっかりと聴きたい」「最後のあたりで泣けてしまった」「ぜひ、知りたい」という、まるで、宇宙人のような奇遇な方がいらっしゃいました。

こころより、感謝申し上げます。

そこで、そうした少数のマニアの方に、特別プレゼントとして「朗読原稿」をお送りすることにいたしました。元ネタはインターネットなどで普及している、数種類の物語を整理したものです。

心静かに、好きなBGMをかけて、じっくりお読みになると、これはこれで、堪能できるものと思われまます。

いや〜、本当に人間の価値観はさまざまです（笑）

最後に、おつきあいいただいた全員のみなさまに感謝いたします。

これからも、勝手に精進してまいりたいと思いますので、機会があれば、どこかでお会いしましょう。

ありがとうございました。

2008年12月 寺沢、長塚

その机を見つけたのは、ドーセット通りの、小道具屋だった。

「19世紀初期の品で、オーク材ですよ」
店の人は、そう言ってすすめた。

前から、こんなフタがついた机が欲しかった。
ただ、ひどい有様だった。
巻き上げ式のフタはこわれているし、脚には、へたくそな修理の跡があった。
でも、ぼくなら、元通りに直せるような気がした。

修理をはじめたのは、クリスマスイブだった。
はじめてみてわかったことだが、これは、結構たいへんな仕事
火に焼けたところや、水をかぶった跡がある。

巻き上げ式のフタをとり、一つづつ引き出しを外していった。ていねいに、一つづつ、一つづつ。

でも、どうしても外せない引き出しがあった。
こうなったら、力づくで開けるよりしようがない。
思い切り、げんこつでたたいた。

すると、引き出しがポンと飛び出して、中から、小さな黒いブリキの箱がでてきた。
箱には、メモがあつて、そこには、ふるえる文字で、こう書いてあつた。

「ジムからの最後の手紙。私とともに埋葬のこと」

むやみに開けちゃいけない。
わかつてはいたが、好奇心に勝てなかった。

箱を開ける。

箱の中に、1通の手紙。

「ドーセット州ブリットポート カッパービーチ 12番地 マクファーンソン夫人へ
1914年12月26日」

タイトルは、「愛しのエミリーへ」

今、私はとても幸せな気分で、この手紙を書いている。

素晴らしいことが起きたんだ。早く君に知らせたくてたまらない。

昨日の朝、われわれは全員、塹壕の中で、ドイツ軍の攻撃に備えていた。クリスマス朝だ。

あたりは、しんと静まりかえり、空気は冷たく、さえわたっていた。

「ドイツ軍の塹壕で、白旗が振られている」味方の兵士から報告があった。

そのうち、ドイツ兵の大声が、無人地帯を越えて響いてきた。

「メリークリスマス！ イギリスさんよ。クリスマスおめでとう」

一同、耳をうたがった。

こちらからも返す者があった。

「こっちからもメリークリスマス！ ドイツ野郎！」

そして、それで終わりと誰もが思った。

ところがそのとき、ドイツ兵の1人が立ち上がって、1人、また1人と塹壕の上にあがっていく

「今日は、クリスマスだ。イギリスさん。こっちには、酒もソーセイジもある。どうだい一緒にやらないか」

気がつくど、10人ほどのドイツ兵が、両軍に挟まれた無人地帯を、武器を持たずに歩いてくる。

最初に立ち上がったのは、若いモリス二等兵だった。

「行きましょう。何ぐずぐずしているんです」

私は、将校だ。やめさせるべきだったかもしれない。

でも、もはやとめられるものではなかった。

無人地帯にむかって、両軍の兵士が歩み寄っていく。

ドイツ軍のグレーの外套と、イギリス軍のカーキの外套が、真ん中で一緒になった。

ドイツの将校が私のところにやってきた。

「私は、ハンス・ボルフ。生まれは、デュセル・ドルフ、楽団でチェロを弾いている。クリスマスおめでとう」

私もあいさつした。

「ジム・マクファアソン大佐だ。クリスマスおめでとう。私は、ドーセットで、学校の教師をしている。イギリスの西南部だ」

私がつてきた支給品のラム酒で乾杯し、ハンスがつてきたソーセージを食べた。それから、互いに語り合った。

エミリー。どんなに夢中で語り合ったかわかるかい。

彼には、奥さんと6か月の息子がいるらしい。

見回すと、無人地帯では、カーキとグレーが混じった固まりで一杯だった。

エミリー、君がクリスマスのために焼いてくれたケーキを、ハンスにふるまってやったよ。

こんなおいしいケーキは食べたことがないと言うから、私も同感だといった。

彼とは、何でも意見があうんだ。敵だというのにね。

そのうち、だれかがサッカーボールを持ち出した。

「ジム、この戦争を終わらせる方法がわかったよ。サッカーの試合で決めればいい。サッカーなら誰も死なずにすむ。夫を失う妻も、親を失う子供もいない」

「クリケットにしてくれないかな。それならイギリスが勝つそうだから」

そんな事をいって、笑いながらサッカーの試合を楽しんだ。

楽しい時間はまたたく間に過ぎた。酒もケーキのとつくに無くなっていった。

もう、終わりにするしかない、だれもがわかっていた。

私は、ハンスに「元気で」と言い、早く家族のもとに帰れるようにと願った。

ハンスは、私にむかって敬礼すると、ゆっくり戻っていった。

まるで別れたくないとでもいうように、途中で一度だけ、こちらをふり返って手を振った。そして、ドイツ軍の塹壕にもどり、何百人というグレーの外套の兵士の1人になった。

愛しのエミリー。

来年のクリスマスには、この戦争も、ただの思い出になっているだろう。

今日の出来事で、どちらの兵士も、どんなに平和を願っているかわかった。

君のもとに帰る日が、もうすぐ来る。私は、そう信じている。

愛をこめて、ジムより。

ぼくは、手紙をたたんで、そつと封筒に戻した。そして、朝までには、やるべき事を決めていた。

クリスマスの日。ぼくは、みんなとは教会に行かなかった。そのかわり、ブリットポードへ車を走らせた。

12番地の家は、焼けこげた残骸になっていた。となりの人に聞いた。

「エミリー・マクファーンさんはどうしてるんですか」

「ああ、あの人がかい。気のいいおばあさんだよ。少々、もうろくしてるがね。101才だもの。あの火事で家を焼くまでは、ここに住んでいたよ。今は、バーリントンの施設に入っている」
ぼくは、バーリントンにむかった。

施設に着くと、係の人を探した。

「エミリーさん、今日は、おつむが、少しハッキリしないようで、あちらでお休みになっています。あの方は身寄りがありません。だから、あなたの顔をみたら喜ぶんじゃないかしら」

ぼくは案内された部屋にむかった。

「こんにちは」

ぼくが声をかけると、ふりむいて、ぼんやりとこちらをみた。

「クリスマスおめでとう。エミリーさん。実は、これを見つけたんです」

ぼくは、手紙を出して渡した。

そのときだった。

エミリーさんの目にハッキリ光がともった。顔中に、喜びがあふれ輝き始めた。

ぼくは、小道具屋で机を買ったことから話し始めた。が、ほとんど聞いていないようだった。

エミリーさんは、しばらくの間、ただ、指先でやさしく手紙をなでていた。

そして、片手を、すつと伸ばしたかと思うと、ぼくの手をとった。

目には涙があふれていた。

「あなた、言ったものね。クリスマスには帰るって。とうとう帰ってきてくれたのね。何より嬉しいプレゼントよ。さあ、ジム、そばに来て。ここに座って」

ぼくが隣に座ると、エミリーさんは、そつと、ぼくのほほにキスをした。